

F-45 胃の集団検診
中村学園大家政 山下歌子

目的 35～59才の日本人の死因で最も多いのは悪性新生物である。がんの初期では自覚症状が少なく、罹患しても見過しやういことが高死亡率の原因になっている。患者は対がん活動を側面から援助するのために、がんの中で最も多い胃癌についての認識度を把握したいと考へ、本調査を行つた。

方法 本学学生の父母 577名（男 302名，女 275名）を無作為抽出して調査対象とし、昭和48年5月1日～14日に調査用紙を配布した。回収率は82.6%であった。設問は各項目ごとに対検定し、男女間の有意性を検討した。

結果 職場での掲示、町内会の回覧板を通じて胃の集団検診申し込み制度があることを90%のものが知っていた。集団検診でがんが発見されることを答へたものは約1/2であり、発見されにくいことを答へたものは約1/3であった。後者は、その理由として、精密検査の必要性をあげた。個人で検診を受ける場合には精密検査を受けることを答へたものが最も多く、検診料支払い方法からも精密検査を受けることが多いことがわかった。昨年度の胃の集団検診を申し込みたものは24%であったが、2%水準で男女間に有意差があり、男の方が積極的に検診申し込みをしていく。この場合、男は職場で、女は回覧板を通じて申し込みた。集団検診を毎年申し込みたものの60%が「どこも悪くはないが検診でがんが発見されるかもしれない」という理由をあげた。昨年度の検診申請を1回かへたものは、その理由に、「自分は健康である」を最も多くあげ、とくに女にこの理由をあげたものが多かった。